

2013年。オラたち、農業のやり方変えました!

日本のように畝を作り区画を作って作物を作る習慣のなかった村では、1年の内、2~3カ月、よくて半年しか作物の栽培ができませんでした。そこで、より効果的に農地を使い、多品目多種類の作物が食べられるように、土づくり、水の使い方、農地デザインなどの研修を、ソムニードから受けてきた47世帯の村人たち。彼らは「モデル農家」として、今までとは少し違ったスタイルで、農業を行いました。



ブータラダ村といえば、身体に優しい農作物

47世帯のモデル農家たちは、農作業シーズンが始まる前に、数か月もウンウン唸りながら、ここにこの作物を植えて、収穫が終わったら次は何を植えて、と農地デザインを描き、計画を立てました。

この農地デザインを基に、堆肥やバイオ農薬を使って栽培した2013年。「今年は市場で野菜を買う量が減った。畑から毎日のように何かを収穫してメシを作った」という声がたくさん聞かれました。

野菜はほとんどが自家消費ですが、穀類は現金収入のために仲買人に売ります。いつもは安く買いたたかれるところを、「今年は、色も大きさも全然違う。今までのように安く買われたらたまったもんじゃない」と、「オラたちの村で採れたレッド・グラムは、1キロ30ルピーで売ります」と、自分たちで価格設定しました。

同様に、「これからオラたちの村の農作物は、オラたちの

村で採取した種で、栽培していく」と村の中に種子銀行(シード・バンク)を立ち上げ、そこが一括して種を取り扱えるように、動き出しました。

2010年に始動した流域管理委員会の活動の一部となるシード・バンク。山から農地まで、自分たちで管理していけるように、一步一步着実に、前に進んでいます。



村から誕生した指導員たち

2007年以来、活動を共にしてきた村人たちの中から生まれた14人の指導員たち。「周りの村でも、オラたちの活動を広めよう」と、近隣の村々へ研修を行いました。「流域とは何か」「自分たちの山の植物や土、川はどんな状態なんだろう」「山をこれ以上荒らさないためには、何が必要なだろう」と、約1年ぶっ通しで、10か村の村人たちが研修を受けました。

そして、山での土壌流出を防ぐ石垣と、鉄砲水を抑える堰堤を、計画を作って予算を立てて、作業を分担して、作り上げました。指導員の中で、**唯一の女性バドマ**。自分の担当エリア以外の村で研修を行うことになった時、**最初は、名前すらも呼んでくれなかった村人たち**でしたが、バドマが根気強く研修を行い、村人の意見を引き出していき、計画を立てられるようになった時、村人たちはバドマの事を、敬意を込めて「マダム」と呼ぶようになりました。

こうした10か村の様子を見聞している別の村から、「オラたちも参加したい。研修を受けさせてくれ」と、次々とオファーが来て、嬉しい悲鳴を上げている指導員たちです。



植物、ウシ、ミミズ、コメ野菜、そしてオラたち。みんな繋がってる。

長年、化学肥料や農薬を使い続けて、疲弊していく土壌。微生物による土壌改良をしていくために、ミミズを使った堆肥作りに取り組みました。コンテナに乗っばを敷いて、牛糞を置き、ミミズを混ぜて、水で溶いた牛糞を敷く。発酵させると、45日目にはサラサラとした堆肥ができあがります。これを田畑に敷くことで、土の中でミミズの卵が孵り、土壌改良に役立ててくれるのです。

同じスリカラム県の「堆肥作り名人」の元へ通ったり自分たちの村へ来てもらったりして、村人たちはノウハウを学びました。

町での就職を諦めきれない村の青年は、「**ボク、ミミズ触れない**」と、くねくね動くミミズを見て及び腰に。

「オレが家族を食わしていくんだ」と研修に人一倍取り組む別の青年は、作業がし易いように堆肥作り小屋を改良し、また、「農薬も有機物で」と、糞と牛の尿から醸成した「バイオ農薬」を使い始め、じわじわと他の村人へも広がります。

堆肥作りに必要な牛糞や牛の尿は、飼っている牛が与えてくれます。牛が食べるエサは、稲や周りの山にある植物から採ってきます。**山から農地まで、無駄なく必要な資源を使い、そしてまた作りだしていくのです。**

サツマイモ栽培から分かること

この地方のサツマイモは、日本で主流の「金時」よりも甘みの少ない、**白いサツマイモ**が主流です。スパイスを使ってさっと煮て、ご飯と一緒に食べる、インドでは珍しい「**甘いカレー**」です。サツマイモ栽培は長年続けられていますが、2013年は少し工夫をした二人のモデル農家がいきました。チンナ・モハンは、小高い畝を作り、イモが大きく育てられる場所を確保しました。ラメーシュは、従来通り平らな所で植えました。チンナ・モハンの畑から採れたサツマイモは、他の倍ほどの大きさで、収穫量もアップ。ラメーシュの所はあまり大きくは生りませんでした。狙いは「**土留め**」だったのです。少し傾斜があった彼のキッチン・ガーデンでは、厚い土が必要なショウガを栽培しましたが、サツマイモのツルが地面を這い延びることで、雨で土が流れていくのを止めていたのです。「土壌が流れないよう、山に石垣を作って植林をしているように、畑やキッチン・ガーデンでも、土が流れださないようにしないと」モデル農家たちは、それぞれの場所にあった方法で、土を作り守りながら、作物を育てることを学んでいます。



ソンプルさんの挑戦

田んぼを担当するモデル農家となったのは、2013年3月頃。畔にも豆や花、瓜系の野菜を育てようとしていた他のモデル農家たちとは反対に、「ワシはコメ以外何もせん」と、コメ作りカイゼンだけに集中する、と言った**ソンプルさん**。

従来の田植えは、種籾を撒いて21日目の苗を使い、4・5本の株を一本とめにして、株と株の間も隙間なく植えていく方法。ソンプルさんも、そうしていました。

けれど、モデル農家として実践するのはSRI農法(幼苗一本植え高収量稲作法)。12日目の若い苗を使い、その名の通り1本ずつ間隔を置いて植え、水量も従来の3分の1程におさえます。

「1本か2本の若いナヨナヨした苗を、25センチ間隔で植えた。地面にヘナ〜と横たわるとる訳よ。あゝダメだ、と思ったさ。周りの村の連中からも、田んぼに出るたびに笑われたしな。」

そしたら1週間か10日ほど経つと、ピンと立っておる。あの時はあ、心の底からホッとしたよ。後はグングン伸びて、11月には周りの田んぼよりも、ワシの稲穂はたくさん実をつけていたわい」

今までの8分の1の量の種もみで、2倍の収穫ができたソンプルさん。

1月に収穫・脱穀が終わると、すぐに二期作に入りました。3月、周りの田んぼは雑草だらけなのに、ソンプルさんの田んぼはほとんど雑草が生えていません。ソンプルさん曰く「化学肥料を撒くと、雑草にも栄養がいくから、雑草もよく生える。だけどワシの所は使っていないから、雑草もあまり生えないし雑草抜きの作業もいらぬ。去年SRIをやった、学んだことさ」

幼苗一本植え高収量稲作法